和訓栞

宇之部

四

津田文庫
文庫 1
1604
4

早稲田大学圖書館藏書

倭訓栞前編四　洞津　谷川士清　纂

宇の部

う　卯ハ兎の義十二生肖より出たり○兎もうとよめりうさきハ後の訓なるへし吐而生子といへる易産なるをもて名くるなるにや○鵜まゝ鸕鷀をよむも産れる義なり万葉集に鵜を義訓せりうの羽をもて産屋をふくこと神代紀にみえ口訣に今も産婦執之易生とみえたりされハと胎生にて口中より吐といへハ滲之雛を吐ハ鷁之能風能水ニ故舟首畫之とあるに似たりといへり鵜ハ鵜鶘にて伽藍鳥と呼ぶ是也○うれけきるをうとぞかりしよめりあるハ世中にうと見え○得字をよむハえの音轉せるを謂也○うむを通ハしてうくるねむまむめむとよめる本紀をむの訓を併せ考へし

△うわ

△ういし　神代紀の國稚地稚をういしといふ也と口訣に見へたるさまをうひ反いなるををていしといへるなり

つだ文庫

010190595884

△うゝゑ　植といふ事萬葉集に見ゆうゑとおなじく植し也○鐖も新撰字鏡に
いひようゝとみえ日本紀乃訓にいひにきてとよめり
△うえふせり　倭名抄に瘨眩をよめり日本紀に痒又困をもよめり相通ふ
△うを　魚をいふ浮尾の義なるべし柳文の注に楚越之人数魚以尾不以頭也
とみゆ○乾魚を鮑とし塩魚を鮑ともいふ○押出し魚とのみいへば鮭の事なりと
大蔵礼にみえたり今ハ鯛をいふ○庭訓に魚躬ニ身を手て削て用ふべきといへり
△うかぶ　浮をいふかぶ反くゝうかむともいへり上と義通へりえひとへかまみむ
めもそえたりけり
うかひ　早朝に喚ふといふ鵜飼の義鵜に魚を捕しめて吐出さしむるをもて
なれバなり一説に卵粥の義也といへり代酔編に閩中諸僧晨粥卵食といへり
うかみ　日本紀に間諜をよみ又候もよめり埃嚢抄にふるき事なるんと登せ
る事をよるるをいふうかゞひみる義也といへり
うかひ　鵜飼也源氏にみづし所のうかひのをさとみえたり長も日本紀
り養鸕部あり訶にはうかひがともとみゆ鸕鷀を水に放ちて年魚を捕

ふる事ハ神武帝の時より見えて西土にハ古へからることなかりしにや隋書ニ我
方俗の事をめづらしげに載たり○鵜飼が瀬ハ近江にあり
うかめ　新撰字鏡に鴻をよめりうハ大の義なるべし○うかめけむうくなりける
なりくは反か也
うかゞふ　窺又伺候をよめり伺候を口語に音よみにいへり古事記にうかゞいくと
もみえたりく反ふく萬葉集に窺をうかふともよめり内を考るの義なりといへり新撰字
鏡に闚又覰をよめり神代紀に覘をよみ窺窬をうかやともよめり
うかる孫　古今集の詞によめりうくなる意なくは反か也
うかるし　浮れうし菅家萬葉集に浮宕をよめり日本紀に浮をうかれ浮浪
をうかれびとゝよめり土着せざるをいふ後撰集にうかれいづるとも見えたり○
うかれめうかれまなどハ遊女をいふ也西都賦に浮遊近縣注に浮行也と
見ゆ翻耕録に艸娘花娘の称も同意なるべし新撰字鏡に婬字をも訓せり
○土断も浮浪客居を謂ふや仁明紀に卽土断輸調庸從當國法とみえ去歳
印本云に作るハ非也文献通考にも天下之民不土断而地着不史版籍而得

其虚實とみへたり土断ハ故土断絶の義にて俗にいふ帳はづれ也○遊仙窟の
狂雞をうかれどりとよめり

うかのみたま　神代紀に倉稲魂をよみ古事記に宇迦之御魂神と書り大
殿祭祝詞に豊宇氣姫命俗詞宇賀能美多麻とみゆうかハうけと通じ食の
義なり○西土にハ稷を五穀の長とす我邦にてハ五穀の神かくまつりせバ
稲をもて五谷の長とせしにやさればこそ神武紀にハ厳稲魂女といづうかのめとよ
めり○うかまつりハ篋笛に宇賀祭とみゆうかのみたまを祭る行事成し
今霜月晦日を祭日とし○伊勢十二月晦夜燈油神事祝詞に豊受皇大神
乃酒殿調御倉御竈屋坐留宇賀御魂神等乃廣前とみゆ○梵に宇賀を財
施と譯す宇賀神ハ蓮華三昧經に出て梵に白蛇を宇賀耶といへり辨財天
と混ずるも亦謬なりといへり谷響續集にハ辨財天經に宇加耶宇賀神な
と記せし五本の經ともに本邦中古の杜撰にして宇賀神若倭國之神
号延喜式丹後国竹野郡大宇加神社是也とみへたり中山傳信錄にハ辨
才天女云即中國斗姥也と見えたり○河海の神ハ倉稲魂也といへり又三
女神を祭りけるも辨財天と混ずるハ最勝王經に在坎窟及河邉とみへたるをもて

△うき　うきふしふ葦かづにおふるあやめ泥田のうきなといふハ泥の浮洲をいへり
うきねといふも同し多く憂事に寄たり○黒髪を雪の中のうき見えぬをい
へるハ浮垢といふ義へし○酒盞をもいふ下文にみへたり古事記に水玉うきをもよめり

うきす　浮洲の義波のうきすといへり梵書に瞻浮洲とみへたり○浮巣の
義にいへるハ鸊鷉によめり無名抄ににほの巣をくふにハ葦の茎を中にこめて
それをくいろげてめぐりにくひなれバ水のそこにもよくあがりひきハさがひてあると
とみへたり　新撰前に
みどりのふるにほのうきすはゆらぎもて見しとすなハみかくれもせね
とよめるハ謬なりとぞ

うきよ　浮世の字西土の書にも見えず通じ歌に多く憂事によめる也人生
難逢開口笑のいひなりとぞ○うきよの綱うきよの庭うき世の浪なと
もよめりうきよの夢といふハ李白が序に浮世如夢とみえて唯識にも未
得真覚常處夢中故佛説為生死長夜とみえたり

うきゝ　槎字楂字なとをよめり日本紀に枯査ともいひ査を水中の浮木こと
みゆ○新勅撰集に
年へたるゆらのうきゝのはてそさやけきかたにくちそむる
此うきゝハ船をいふ竟宴和哥集にハうきゝとなりたるを作り応
神天皇の時枯野といふ船の朽たるを琴に造り其音鏗鏘而遠聆ときこえたり
○うきの河かよふうきゝをよめるハ漢の張騫か故事にて倭名抄に査を船類
に入たり○魚にうきゝといふ有形海鷂魚に似て大さ一二丈奥州常州に出名
山鈔にハ嶽魚にやといへり一説に大亀也といへり涅槃経の盲亀値浮木の孔
なりといふなるへし文治二年の百首に
たとへても浪路の亀の浮木にハあふても猶世をもとめつゝそ
・又雑阿含経にもみえたり
うきせ　憂き瀬の義岡部氏古事記の落苦瀬而患惚といへるをよみて
さまよひ人の行し方にむなしく落るといふ沈む義也
うきしは　源氏乃奇によめるハうきしほといへる名所にあらす○浮海の原ハ

強河なり兼久か歌に中納言宗行の
あはれにもそてをぬらしてうきかはにわか命乃消んとそおもふ
○夫木集に
松かりふくいけのうき風吹にけらし浪によるよるうきの浦やま
こハ伊勢度会郡松下村の東なる伊勢浦の歌也　出羽の大泉と
いふ所ハ一里四方ありて浮野ありとて行かよの六十八ありといふ時見たり
二ありとそ○崇徳帝の時に鈔蓮の流されたる浮島ハ常陸に生む
う紀にあり　神代紀に浮渚在平をうきしまりたいらにと訓り古事記に宇岐士摩理に作り浮しま
り立たしの義成へし音注の爾志の音なるをかそよめるハいかゝ
△うく　浮をいふうかふに同し○説に憂るをもいへり憂の音にかよはす○受
字兼字なとをもよめり上来の義なるへし
うくハ　日本紀に羽紫の縉盃を浮羽といふと見えて羽後風土記に浮羽と
いへり古事記にうき羽とみゆしもしも義なり古へハ水に浮けて酒宴せし故へ
逸詩にも羽觴随流波と見えたり

うぐつく　日本紀文選なとに馳騁をよみ新撰字鏡に蹢きゝ諧とよめり
又騙をうぐつきるともよみたり

△うけ　食の訓なり豊宇氣毗賣神なり略してけといふ御食津神なり
轉してうかといふ宇迦之御魂神なり○神代紀に覆槽をよみ古事記に
伏汙氣とみえ式に宇氣槽とみえたり　古語拾遺には覆誓槽に作り古
語宇氣布祢約誓之意とみえたり　新井氏の説に東土の俗に鼕を虚
にして其中に小しき穴ある桶を内向て浮へ並て其座をうつに鼓のごとくなる
音あるをそれをうけといひて是鼓の初なりといひ傳ふといへり風土記に越俗
飲宴鼓桙為樂といへるがごとし　桙は鼕と同しきなり　和名抄にみえたり○倭
名抄に切韻を引て泛子は釣別名也漢語抄にうけ今按網具又有此名と
みゆさらば浮の義也泛子は釣のうきつけるものなり又浮子ともいへり荻梗を
もてするを宋小説にみゆ韓退之が詩に羽沈知食駛ともみえ唐の世益
浮以羽也とみえたり堅魚を釣に雞の羽をうけたり網具にいふは藻屑なり
綱緒に付る桶なりといふをいへり今うけ引なといふ是の藻引沖引なとも同じなり

書經　厥土黒墳（ウゴモテリ）
注墳土脉墳起

前にうけの緒うけ縄なともあり○大魚の名にもみえたり形うけのごとし
うけひ　日本紀に誓約字誓字祈字なとをよめり又盟をうけふとよむも同し
請言の義いのりちかふ事をいへり○源氏物語に念なとのうけひしげにみさ
まかよひ伊勢物語に罪もなき人をうけへはといへるは詛ふ方にいへりとて見ゆ
本に咒詛と填たり古事記にも宇氣比死とみえたり
うけぶみ　請文の義也朝野群載にみえ西諠紙に云るうけとりの形を領票
又票書なといへり三代格延喜式なとにいふ返抄も是同し○うけかんは保人
なりうけをとるといふ事未信編に取保とみえたり
うけひがり　日本紀に祈狩をよめり事の吉凶を獲物にてかんかふるの猟を
いへり義は祥を試むるにて祈みて寢まるといへるがごとし

△うごく　動揺といふ義なりともいふ
うごもつ　墳とよめり土沸起也と注せり日本紀にうごもちたるともよめり
うごめく　春蟲といふ源氏にうごめくとも見えたり動く意也○うごくなど
いふも同じ

うごなはる　日本紀に集をよめり集侍をも朝集をもよめり儀式に参集
讀曰末為宇古那波礼留とみゆうごなはりともうごなはるともよめり春蟲の
義なりてハ延ていふ

△うき　憂事をいふ世中のうきハ辛もあるものなりといふハ宇佐家を
かけるなり○宇佐使須河勢物語に宇佐の使の始めよりいへるなるべし
うきゆづる　古事記に御日本紀の哥にもよめり又紀に所謂儲弦(ウサユヅル)を
に新縄副弦とかくし諸らも同しきや

△うし　万葉集に倦をよめり其名伊勢物語に倦もよめりきしうきやい
ふといへるなり○新撰字鏡に紀氏少姫献歌とて
かくばかりものを思ひあけくれに我身のうしとなりけん
又云く
人ごゝろ秋の末にもあらなくにうき事のみもしげくなるらめ
○日本紀に君字郷字大人字をうしとよめりうしきものなりといふ
也なり○主をよめるも義同し○牛も人の労に代ることを称して名と

せるなるべし或ハ大肉(ウシ)の義といへり其後漢の太宰などよりいふ説
文字も牛を大物とかけり朱ハ順風をおふるハ逆風をおふといへり○倉庫
なとにうしといふハ伴の字なるべし通雅に撑屋使不欹邪曰伴とみえて
えり音箭なるを木釘の類のせんといふもいかゞ
うしほ　潮をよめり古事記に海塩とあり塩ハ対へていふなり
新撰字鏡にハしほうづとよめり字彙に潮者地喘息也随月消長早
曰潮晩曰汐所以應月者従其類也
うしろ　後字をよめり裡尻の義なるべし後ん後に見といへり○東帯のしりを
造るを源氏にはうしろとさそへきつくろひとみえたり○万葉集に莚をうし
ろとよめるハしとねに敷するをなり
うしはく　古事記に海うしはける葦原の中つ國とみえ程固或は吾と
領らすと紀にみせとみえ万葉集にも山ミを牛掃とよめりうしハ大人勇猛
の称なりはくハ万葉集に人ともやすしやすくあさなといふめく掃ひ清める
乃さなへし大丈夫當掃除天下のとさうやうに絶となる弦といへり

うしみつ　丑の時乃三刻をいふ也古今著聞集に鶏鳴といへり禁秘抄に丑杭以後為明日分とミゆ拾遺集に人心うしみつ今ハ頼ましよといへり
うしまつり　山城太秦桂宮院の中にある所の大避神社ハ秦氏の祖先之なり九月十二日祭の前夜牛の一頭にのりて縄をつけ兼仕て其の傍に紙の烏帽子をきせ紙の假面をかけ疑を覆ひ縄をもて腹を巻て彼牛にのせて西の民家に至ると幸て祠を巡ると是ハ列異傳にいふ秦文公の時にありし陳寶祠の事に据るなるべし 密に紀比賣語曾社神の事共按ずべし
うしろめたし　源氏の抄に影護の字を填めり出雲に洋なり寸官君伊勢物語に後目痛とみゆ心をしるべしといへり○うしろやすきうしろがろさなともいふべしからうしろめたき義に對へて詞也○俗にうしろべたなといふハうしろめたきの訛也といへり撰集抄にうしろめたなき事とかけり
△うす　臼をいふ舂臼の義なるべしすハ居とかよふ詞也三才圖會に主磨曰臍注磨曰眼と見えたり此邦の稱も是に同じ○横臼堅臼あり按臼ハ古事記に見ゆ唐臼と呼ハまたしくれ土龍と木礱也といへり○失臼といへり

せろこせろ反すなり
うず　神代紀に鈿字推古紀にハ髻華字をよみ万葉集にうずの玉陰とよみたり後世の釵頭花なるべしといへり唐書に頂有華蘤四披といふも是なり○倭名鈔鞍馬の具にうずといふ雲珠と出て今いふ瘦隠也といへり又飾抄に据に雲形の圖ありて引おなり伊勢御神宝の白馬形にも雲珠ハ左右の鞦の交結ある處に居置ることといへり車にも此名ある事みえたれハ古へ牛にもかけしなるべし鞍馬の名のうずを據といふもいふなりといへり髻華にさしたる據の義なるを雲珠にいひかけたる事なるべき也
かくうつや物もかさてぬ古里の庭もせになりてうすゝくかな
雲珠ハ唐鞍に限りたる事となんいふ○本草に八雲母色青白多赤者名雲珠とみえたり
うすし　薄をよむ新撰字鏡に稀を訓せりうすらうすらひ又かすかなるかさねけうそ用うるにて又らを加へてもよめり○磷をうすろぐとよめる義同じ日本紀に羅をうすものとよめり落機の義を源氏にうすはたとみえたり六帖に

さほ姫のおりかけさらすうすはたの霞たちきる春の野辺かな
勅撰集におりかけさらすうすはたる機といふハいかゞしといへり
うすずみ　紙にいふ宿紙也といへり此下にみえし墨染に同しといへり 後拾
遺集にうすゞみにかく玉づさと見ゆるかなハ紙墨二品をかくるにや 全
浙兵制にみえたり
おりものハ筆にもなみだにも深りて急しとかくに墨の薄くなるよ
◯禁裡の馬の名に呼し事十訓抄に見えて 能登守教経の馬判官義経なる
ふもとあり ◯女中詞にそばがゆをいひ又狭衣がゆをもいへり
うすずみ　大嘗會式に薄疊とみゆ又うすと屋りといふ薦縁の義二様
一説にみえたり古へのうすみハ五位以上の用へし 韓子に禹王蒋席を作り頼縁をと
ろくものハ縁の飾をかへる始め成へしといへり 涼簟といふも是なり
△うせる　失字の字をよめハ給語之神代紀に存をうせぬとよむも不亡の意之
◯行事をうせるといふ給語ハ孝列のかよりといへり 伊勢物語をもうせんとうせ
るなといへり ◯死をいふも失の義之 神代紀に喪亡をうせたりとよみ 伊勢
物語に親王うせ給ひてとみえたり ◯倭名抄に鼿をうそめり 說文に以鼻
動物也とみゆ
△うそ　虚偽をいふ浮虚の義なるへし 或ハ嘘の轉也ともいふ古語也 ◯獺を
いふも嘘をつく獣なるを ◯をそともいへり嘯を義ともいへり 嘯時ハ色に溢て 皮
脚を互に挙て琴を弾しまを揺かすかごとし又緒ようそ出て根ひくといふ
ふ雄をてりうそといふ歌のもとありまた鳥の字に同し 雌をめそといふといひ
居り 嘈嘈といへり 新撰字鏡に嚶をいふとよむも是也 或ハ鵯をうそに
めりハ和名に鶯もあるといへりす ◯うそひきといふ俗語も亦なるに据
なるへし ◯うそ川ハ其所によれり
うそふく　神代紀に嘯をうそふくとよめり 新撰字鏡にうそむくとよめり 嘯
うそぶきの鳴きなどをいふ歌ようそ打ふきてとよめるをうそぶきたる
うりそふくといふ詞に同し ◯假面にうそふきといふも嘯く体をなせる
面相なり
うそぐらし　うそうす暗きの意なるへし 薄暮ハ迫晩の義なれと

うすとのふハ梲梁をいふや宇とよむがごとし烏兎昏の義とするハいかゞ
△うた　歌をいふうたふの義うたふて心をやるなり○万葉集に謌と倭詩と
もいひ長謌を賦ともいへるハ相親しむるをいへ也○雅樂をうたまひとよむハ
異語也○うたひをうたふといへり大神宮式に歌長(ヲサ)三人ともみえて清
少納言にうたハ杉たてる門神樂歌もをかしとみえたり古今集に
わが庵ハみわの山もとこひしくハとぶらひきませ杉たてる門
六帖及古來風体抄にハ三輪大明神の御歌なりといへりされバうたひそめつる
なるべし万葉集に
月よ日よかはりゆくとも久にふるみむろの山のとつみやところ
此哥もうたへるにや源氏物語にみえたり○鶉田寺ハ遠州蓁原郡鶉田
村にあり故事靈異記にみゆ○うた津ハ讃岐にあり嚴嶋詣記にみゆ
○うたの濱ハ下野中禅寺にあり宗祇の哥
哥浦の哥の濱ゑり舟とめて面影かすしきをもとめるかな
うたひ　謡をよめりうたふと同し曲舞の本家の義なり揔て後世にいふ

鹿苑院殿に始るといへり詩人玉屑に通乎俚俗曰謡とみえたり○正月二日を謡
初とするハ信長公濃州岐阜城にまします時に東神君に始るとぞ
うたゑ　歌繪の義也後撰集にみちのくへまかりける人に扇てうしてうたゑ
書せ侍る源氏にあしでうたゑをかきひくるにかけとめづへくと見えたり葦
手とハ少異なるにや或繪にやといふにハ矢を繪にかきさしといふにハ輪をゑがき
て一首をつらぬるをうたゑといふといへり詩を無色の繪といひ繪を有色の詩
といへハ哥も同しく繪にゑがくへし俗にうんとうゑといふに似たり
うたへ　訴訟をよめり口語音にもいへり歌と義通ふなるへしうつたふといふ
○日本紀に刑官をうたへのつかさとよめり和名抄にうたへたゞすつかさと
みゆ刑部省を訟訴(ウタヘ)之司と号せし後勅によて定(タヽス)訟之司と号せらるよし
三代実録にみえたり朝野群載にハうたへたゞすつかさとよめり
うたゝ　轉字をよめり未必(ウタカヒ)と義通へり念字よりハ力ありうたてハ物の甚
なりゆくをいふにて古事紀に其悪態不止而轉とみえ又哥によめるうたけ
ぶふとも見ゆ轉氣ぶふの義にて修りあるをいふがなしといへり○八雲

湖月抄にはうたてそことう宣へり源氏にいとうたてありまて世をうたてと
見ゆ古今集なり
花と見て折らんとすれば女郎花うたてあるさまの名にこそありけれ
○天正のころの戯才に勝氏あり
うたて　日本紀に奇偉をうたてとよみ新六帖にうたてうたて世と
よみ貫之集にうたてうたて神とよめるはことに万葉集にありて薄情を訓せり
古今集にもこそうたてふくるはと見ゆ顕昭はうたてありといふにてもとと
いへり古事記に宇多氏物云と見えたり憂く堪へがたきの義に見えて也万葉
集にもうたてけにとも見ゆ能にうたてしきといふことも菅家万葉には別様
と書せたまへりうたてまほしの中にもとまはれんとばかり奇之世のならぬ小
わびといふがぬし
うだく　日本紀に抱をよめり是はいだくといへり撰集抄にも鞠とらふ
いたへしとみえたり
うたげ　日本紀に宴をよめり打上の義ちはら反たゝ顕宗紀に室寿(ムロホキ)おしも手掌(タナソコ)

もやらくは掬上てくり釈に飲酒の義也とみえたり又欲酒の義ことも
いへりさけを竹の筒にも三日うちはなぞあそぶといふあり
うたがき　日本紀に歌場とかきて古事紀に歌垣続日本紀に歌垣とみえたり
うつる人の並へるを垣といふ友垣のたぐひ也踏歌と同義なるべし其服並
着青摺細布衣垂紅長紐男女相並分行徐進歌曰云々と続紀に見えたり
うかゞふ　遊仙窟に未必とよめり虚索(ウカヽタ)の字ふや古事記の窺(ウカヽフ)の字をといふ
はしの義をこの義なともいへり又危くかりそめなることを定めなくもろくあさ
なとふみもまたよめりといへり兵機式に若詠不忌物時うかゝさといふとも
又船うかくといふをも見えたり万葉集に
常のさるかく山吹うかぐても君かまふはむちらんかも
ちるれそまにさふむろの木うかがでも久しき時をとめてけるかも
○倭名抄に沫雨をよめり淮南子の注に沫雨雨潦上沫起若覆盆と見へたり
方丈記に逝川の流は絶ずしてしかももとの水にあらず流にうかぶうた
かたはかつ消かつ結んて久しくとゞまる事なし世中にある人のすみかとも

名とするかくれなしといへり樂普和尚浮漚の頌に雲天雨落庭中水水上漂

漂見漚起前後相續無窮已本因雨滴水成漚還縁風激漚歸水と見えたり

未必と義通へり万葉集に

うたかたもいひつゝもあるか吾ならハ土にハ落す空にけなまし

新後撰集に

水の面にうきてつらふるうたかたのきえぬまにかゝる世の中

○未必と泡沫とを義をかねてよめる新後撰集に

おもひ川絶えす流るゝ水のあはのうたかた人にあはて消めや

うたがふ　疑をよめり未必の義也うたかふも歩用らしき詞也日本紀に

猜をよみ古今伊勢物語に猶字をよめり狐疑の義也○うた

らく反るを○俗語に七夜ゑて人を疑ていふも妄に邪疑をへからくといふハ

うたゝね　轉寝の義俗にころびねといふ也宰予か晝寝をもてよめるなら

拾遺集に

たらちねの親のいさめしうたゝねハ物思ふ時のわさにそありける

うたれま　歌が間なり津大守実定公の家にありて西行法師に對面せら

れし事井蛙抄に見ゆ定家卿ハ必ず其南面を洞開し並に事すへからすとめ

て襟を整へ端坐して給へりと正徹物語に見ゆ

うたよみ　神代紀に歌字をよめり歌よみをむねとひたすらつとめて歌人も

よみびとといへり又日本紀に謡字をよめりさるをよむとも草紙にもうたよみ

しておこせたるといへり

うたうら　歌占也歌及をひかせて占をとるなり短冊の占もあり

うたあはせ　禁中の歌合ハ村上帝に始まりし也又記に見ゆ左右をわかち

方人をたてて歌を合せて優劣を判せらる○一番の左ハ左とへてかくすると

取定とす相合等も同じといへり○詩合といふ事も村上帝の御時に

見え詩歌合ハ順徳院の御時に見ゆ○後鳥羽院の御時精撰の続合も見えたり

うたくさり　歌鎖の義文字鎖のおなし又三ツくさり虫くさりあり

うたまくら　歌枕也枕詞より出たる語成へし詞のつきさといふ萬好も今を

よみならへる同し様に枕もむかしの人のよめるハ文字に同し物にならすと

といへり名所の哥とよめる哥もいふ経周か五代集の哥枕又実方中将の
故事にも見へて哥枕といひそめたるは奥羽あたりの事なれは聖武
の御宇より鎮守府を建置き蝦夷にかまへける公卿方の事にて正しき人く
もたくある事なれるよしといへり
うたよみびと　日本紀に詞人をよめり後世歌人といへる是なり続紀に
凡人和歌を詠ずる事に聞えて故に有毎秋風漢旅館無人暮雨魂蘭省花
時錦帳下盧山雨夜草庵中の句を誦せしは意楮自ら高きなりといへる正
徹物語にみえたり
△うち　内裡中なとよめり禁者といふも義同じ○書を内といふも西土の語
なり○うち遣うち続くうちしらうち過るうち絶てうち渡すなといふは
西土も同じ韻書に項氏家説曰俗間助語多與本辭相反其於打字用之
尤多凡打疊打聽打請打量打睡無非打者不但擊打之義而已と見えたり
是等は無益なりと天象にてもうち霞むうちなびくうちぬくなともいやく
続きなることをいふめり

うぢ　氏をいふうぢいづ申す出の義成へし氏字かしと出字と同字にて人
乃氏をいふは出自といへるも此義なりといへり○古へ大氏小氏の別あり天智紀
に見えたり万葉集に宇治川を氏河とかけりまて八十氏河なと属けり又是
河と書る事あり萬葉地理志にも見えし淀渡出李雲傳の五氏来
備の語に是を氏と通せしも見えたり橘氏の祖神梅宮を橘家の人
乃宇治氏とよぶを是定といふを為家記には氏宗といへるも同じ義なりといへり
○喜撰法師か名をもきいたるは伊勢の宇治に住撰法師か
世をうぢ山とよみしに據て吉記に車駕發福原至宇治と書る桜井
矢田部郷と
うちで　打出の義也衣かさねの五節なとの打出は衣ぎぬ
の上にからきぬにそねてあるかと見ゆ衣を出して打かけ置○御簾の下
より裾を出したる古画多し袖をも出して裾を出すを打出といへり
紅次第に女房雖候不出其袖と見ゆ○今昔物語に打出の太刀とい
ふ見えたり○打出の小槌は盧裏紀に鬼の寶にいふあり○打出の濱は近

江大津の邑之寛平中の記にみえたり

うちは　團扇をいふ倭名抄に見ゆ撲羽の義也蚊蝿を撲拂ふ也唐詩にも輕羅小扇撲流螢と見ゆめりてハ延喜式に圓羽構羽あるといへるも同義也
○軍配團扇ハ別制なり蒲のうちハ蟹裏記に見えたりびらうちハとも
蒲葵之手葉に東人多以蒲爲之嶺南以蒲葵爲之といへり琉球にて
婦女の用うるハ半面の半月扇といふ

うちと　内外をよめり云ことの略也○うちとのみやハ伊勢の神宮をいふなまり新古今集なりけるに外宮の称なる古事記に出て内宮外宮の称ハ五十鈴川の内外といふなるべし神名秘書に村上天皇御宇祭主公節之時皇太神者奥座故号内宮度相宮者外坐故曰外宮始自此時也と見えたり
○續古事談に白河院の御前にて爲隆事を奏しけるに頭月かさなりてうふさげるに思召けるを此次でなるや文のあるかぎり奏しもてんとおりひてあらずなりて居たりけるに院たちかりしきさんとしけるの御後見ずなりて祭主大中臣某謹申請天裁事と讀さかせまゐらせたりけれハ大神宮の訴

人なみとて帰り居さセめひとゝろにしと見えゆ今もさんしさせ給ハかへらぬ事なるとて

うちぎ　倭名抄に褂をよめり又袿に作る打衣の義婦人上衣也と注せりさきと男女通用せり建武年中行事に御袿の人めしてとも見ゆ侍中群要に侍臣より源氏に引入の大臣の禄に賜ふ大和物語に躬恒か前の賞に賜ひし事見えて西土にても江充か用ゐし事見えたりといへり是ハ大袿也○小うちきはこハ婦人の服也うちきハさらに重ねてきる物也但からきぬをきる時ハ小袿をきる此例也左經記に寛仁二年御元服之時賜禄参議大褂自大宮給禄大臣女装束参議小褂袴とも見えて太神宮へ献させらるゝ男帶装束なる寛治四年伊勢奉幣使記に見ゆ

うちをし　神代紀に見ゆ假に打渡しゝる橋也又源氏物語紙屋とふ見えてうるさく細流に渡散のきうり馬屋に橋をうちわたしてかよふ所としたり萬葉集に
をとをちく来まで天河打橋わたす君か来むさため

うちかけ　倭名抄に裲襠をよめり唐國簿令に見ゆ前と後とにかゝる袖

なしの服ゆゑの掛といへり○革皮の座あるといふも是同じ○婦人の
うちぎをもいへりかいどりともいふ俗にいふの京紙をうちといふもいふも同じ
うぢうと　三代実録に大神宮氏人又諸社祝部氏人なとゝ見えて東鑑に
皆氏挙著非氏人なとも見えたり風雅集に
みかさ山その氏人の物なれハさしもあつきそや神ハみるらむ
うぢがみ　書紀に氏神と見えたり祖先の神をいふなり氏子と対しい
へり産土(ウブスナ)神とひとつにおもへるハわろし字彙に嫓字の下に先蠶西陵氏神と見ゆ
うちまき
散米をいふ大殿祭(ホカヒ)の祝詞の註に今世産屋以辟(サキ)木束(ツカ)稲置
於戸邊乃以米散屋中と云四時祭式の大殿祭の條に御巫等散米酒
切木綿殿内四角退出と見えたり辟木ハ屋船久々能遅命是木霊也といへる
束稲ハ屋船豊宇気姫是稲霊也といへる散米ハ新嘗に枉津日神の入来
らん故饗(ヤハ)和して去らしむる也とぞ天孫日向高千穂乃峯に天降りたまひ
し時よりの事紀にみえたる日向風土記に見えたり産屋の中撤れたるハ蒙女目
記に見えて客忤の中撤の事ハ源氏物語にも見えたり○今昔物語にも被さ

なれ児どもの中よりハ必まもりを重ねて見ゆ○米俵をもうちまきと
といふハ俵撒の義なり
うちなし　打出しの義筆長の記に昔人衣服打製今人装束如木
と見ゆ是右大臣の袍をいへり打製ハ今のうちさ張の義如木ハ多く糊し
て張をはらくせる者をといへり
うちぎぬ　打衣の義にて汁に紅打柏とかける建武年中行事に紅の
うちぎぬと見ゆ即ち衣のよそほひを略せる也くもなれの事をといへり門
主あくもおのれの事海人藻芥に見えたり○胡曹抄に官奏の時の執表
時不着打衣と見ゆ
うちはぶき　打羽振(ブキ)の義なり古事記に打羽挙来(ツキ)人と見ゆ阜氏藻林に
鳥羽之飛者高挙振六翮ともかけり
うちびさす　万葉集に肉日刺と見ゆ物の隙より日の指入をいふそれを
うちびさす宮とつゞけたるハ宮殿の構のよきをほめて西都賦に上反宇以
蓋戴激日景以納光と見えたり又顕見(ウツシ)日のさすとつゞけるにや或ハ天子ハ

聖日ともかけるハ玄の內に日のさしますこゝろなるといへり

うちがたな　打刀の義東鑑に一尺餘の也とみえたり武備志に云急抜
られべしといへり戰場に太刀打刀とならべて出ゐるもみえたり太刀のぬく
まそはし常なりしもべひきさ股かけ鞭むすびなどの打刀なりといへり嫁入
の姫の輿の內にも入ておく太誌れにみえたり又是のよふさすちひさき刀
なりともいへり

うぢのをさ　天智紀に氏上をうぢのかみとよみ天武紀に氏長とみゆ今の
氏長者く宇文周の時の宗長に近し文武紀に氏上の副を助ともいへり

うちむらひぶみ　打向文の義後京名目にうちむらひ文とも侍るハ上の御
ごとのでもいはぬ君のかさられ侍るもを前に給めさむらひの棄し
ふところも拘せで給ふかまつる文之とみえたり

うぢのはしひめ　宇治の橋姫とも又宇治の玉姫ともいふ古詞に
小筵に衣かたしきこよひもや我を待らん宇治の橋姫
此歌離宮の神詠とも住吉の神詠ともいひ傳へり橋ハ釈道昭か造

る今橋のたもとにます神祠ハ後人の好事の作なるべしうぢのはしひめハ實
に愛姫の義なるべしといへり

うちみだりのはこ　源氏に見ゆ和名抄に巾箱盛手巾之器也俗云打乱匣
とみえたり髪をけづる時に打乱せしをおさむるにや元服の時櫛雑具等
を入の箱にて硯蓋の如く縁ありて包むといへり

うちはらひのぬの　神今食に用ゐさせられし物也延喜式に設打掃布一
條納楊筥とみえたり打掃布ハ打掃絹と手巾をいへり

△うつ　日本紀に全珍美等の字をうつとよめり又擲
字をよむ撃也と注せり○空をもうつとよめり綜つの義にや○討伐撃搏の類
をうつむハうつと通へり○古事記に批をうつとよみ新撰字鏡に批をたゝくと
てうつとよめり○棋を圍碁博奕をうつともいへり○鷹に餌を雪に多
くかへハ胸にうちをきて吐出すをもうつといへり○綿打ハ弓弾
なり○宇都宮ハ下野國也宇都宮氏ハ藤原兼房公の子信宗圓宇都
宮別當となりしより出東鑑に宇都宮檢校とも見ゆ○宇都峯親王ハ後

醍醐帝の皇子也
うづ　渦をよめり白水の義なるべしうづまくとも訓よめり盤渦也と
いへり或ハ渋をよめり洄流也と注せり○祝詞式に宇豆の幣帛とみえたるハ
伊豆ともいひて嚴の義又推の義にてうづまさの意なりにや
うづき　卯花月といふの義といへり旧説にハ此花盛なれハ又周正の四月ハ
卯月也と詩の注にみえたりともいへり○卯杖はさいふハ卯花の実名也
○祢宜のまつる卯杖といふハ賀茂祭の杖の先はかならす卯杖の名あるとも
みえたり新續古今集に
もとつ志らぬ賀茂のみあれの志めの内に紙の身をも揺らふらむ
八日を灌佛とするとをてあり
うつけ　日本紀に虚字あて字なしとよめり虚氣の義なるへし俗に白
痴を称せるハ經潅書に空虚之質といへる意にして俗に腔字も造れり
うつく　霊異記に現をよめり義に對へていへり全字の意なり万葉集に
我つくとよみたり

うつ渉　遷移をいふ字の義にうつりかはるを渉めく現在とよめり推移の義を
なるへし○棄るを古語うつるともいふ神代紀に吹棄をふきうつるとよ
めりすとうと韻會す○うつるの義うつるとは露をいふとて
なれたるをもいへり○寫のうつるハ傳染也
うつす　寫をよめり韻會に轉本曰寫又摹書曰寫とみえたり字書に
いふも画せり○みえたるし八陸書之字うつし八摹法也○唐高宗
乃語に朕思讀十遍不如寫一遍とみえたり俗語の意も同し
うつく　古今集女の名に寵とみえたり奥義抄にさよめり竈ハ寵の
誤なりうつくしとよむへきにや字書に愛也とみえたり大納言源定か
女なりといへり
うづゐ　踞をいふうづくまり居也論語に夷俟とみえたり○拎る人を俗に
うづるものといふも此義なるへし
うつお　空の義なり○源氏物語にうちおぎ袖いつくしきけるとうつほまて
おちけるまへりとみゆるなかき○おちを抜もなにとうつほといへりとそ

○うつぼ木ハ窾木也うつほぶねハ獨木舟也といへり○女叙位に空勘文と
いふ事あり只例をかりにのせて叙すべき者を載せぬをいふ江次第に見えたり
○禁中にて葱をうつほといふ也海人藻芥に見えたり職人歌合にも
うつほ草とよめり○倭名鈔に未天河水をうつほみづとよめり
つるといふもうつほと同じ窕をよめり

うつぼ　童蒙頌韻に靫をよむ矢箇をいふ韛をよめり廣韻に韛靫ハ盛
箭室と見えたり平家物語にうつぼといふもの見えたり空穗記に猿
の皮のうつぼといふ詞にや空穗の義にや東鑑にハ羽壺とも書り壺籙の義
なり西土にも箭壺盧の名有り源義家朝臣箙の箙を見て制せしより
はじまりしと卜部兼倶の説也靫字楠正成造るといふ矢賦より出たり
とて埃嚢抄に案をよめるハウツホ三字の合字也太平記に簶をよめる
ハ蘭の誤にや日本紀にいふ歩靫の遺制成べし○夏枯草をうつぼ
ぐさといふも其の形の似たるをもて也倭名抄に夏枯草弁色立成延
喜式にハ蔚蕳草と見えたるも是にや白およそもあり文を海うつぼと称

せるハ草蓯蓉也といへり○是も品ありといへり

うづゑ　卯杖也正月上ノ卯日桃梅椿柳などをもて杖を作りあるハ糸
にて巻て太やけにたてまつる建武年中行事につくるも所生氣の方獣のすが
たを作て卯杖とて杖おきたる類聚国史延喜式などにくはし剛卯とも殺杖とも
見えたり漢魏の故事にて我邦にてハ持統紀より始て見えて百官参内
の時に獻ずる儀もあり其の辞せまうる名の杖をたまはりてと見えて旋威
の年中行事には日蔭とも用ひられハ席葉にて卯杖の詩に女蘿色
舊大椿枝と作られり伊勢物語にもなりし事綴式慢に見えたり○うづ
ゑのはうし枕草紙に見えし熱田の祭に卯杖舞あり

うづち　江次第に糸所進卯槌と見えたり卯杖と同じきなりし源氏の物にい
為り枕草紙に五寸ばかりなる卯槌二ツを卯杖のさまにかしらつつみなどし
て山たちばなひかげ山すげなどうつくしげにかざりてと見えたるも形の
実なる成べし

うつし　日本紀に顕をよめり現に同し○源氏にうつし馬又うつし心をなど

馬にうつしおきてとミゆ和名鈔に移鞍ハ唐鞍をうつしたるなりといへり朝光寺に
むちある小野のみまきの馬のうつしに駒のおもしろきを
○江次第に鴨頭(ツキノ)移とみえたり顕昭説に露草の花を京御に染て又是を
うつして色を染るをうつしといふ也といへり源平盛衰記安徳帝誕
生の所に法皇ハ今熊野へ御参詣ありて移をまゐらせさせたまひけり
とみえたり萬葉集
秋の露ハ移なりけり水鳥の青羽の山のもみぢ見れば
○大移をなりと唐移をもいふ三つの人をも及ふなを採て給ひとす
うづなひ　續日本紀の宣命に相宇豆奈比奉相扶奉ともおうづなひなり
福ひなりとみえたり大嘗祭祝詞中臣寿詞にハうづのひともいへり
萬葉集にあめつちの神おうつなひとみえて又現をよめり相共なひとも
出せり天神地祇承諾の義とも也といへり
うつくし　齊明天皇の御歌にも也珍奇(ウツクシ)の義も○萬葉集に愛をよ
めり孝徳紀の歌にもうつくし妹万葉集にうつくし母又妻を様てう

つくし人と見ゆ日本紀に総をうつくしむとよめりいつくしむと同じ義に通へり○江
州石部の金勝寺にうつくし松といふありて一山悉く此松にて枝葉の撓粧なり
松と称せり
うつろふ　移ろふ也神代紀に遷轉をよめり詞に移かけの義まさなるへ
散りかけて変るをもいふ也○移りけの水に落る桜の香の袖に染なるを
いふ鳥をも云也○相映をうつろふとよめるもまた多し露草へ移の影の見ゆる
をいふ也○もみぢ葉のちるをよめる歌多し顕昭の説にも見えたり○た
とふとも至れり古ほとの時世のなどにふるをうつろふとも云り
うつむろ　神代紀に無戸室をよめりうつハ全字の訓なり室ハ四方に無戸
をいふといへり
うつぼり　新撰字鏡に梱又梁をよめり全張(ウツハリ)の義にや
うつそ　令義解に麻績連等續(ウミテ)麻以織二敷和(ニギ)衣一とみえて釈に敷和ハ
うつそ也といへり美機の義なるにや万葉集にうつそといへと敷細布ともよ
むさしまは敷妙の和妙といふにかなへし

うづまさ　太秦をよめり雄略天皇の時に秦酒公絹綿を多く積てたてまつり
されば姓をうつまさとたまひぬ又は埋まさとも書は誤なりし日本紀古語
拾遺集にも見えたり
うちたへ　万葉集に打栲者といへるは栲の義にて織布と注せり○う
つたへにといふハ栲なりの義なるべし打細ともいふ万葉集より古今日記嬉
拾貝紀源氏物語にも見えたり八雲御抄にうちたへとは同じことにへ
又うちつけにの言ともいふ源氏よりつゞきにたゞひたすらてにありたまへと
見ゆやがての言なりといひ下る見集り
其外ハぬりそめものといふことにはさんとやみし
又喜撰式にハ若詠浮物時うつしといへと見えたり又ひとへにの言とも
いへり新勅撰集より
打払ひをも磯辺の波のうつ事にありきぬべき神のうへなる
に寄りてハ打故にとさこゆ日本紀新撰字鏡に故をことゝいふとよめり
うつせみ山家集にみゆ打被山と云りき

うつゆふ　日本紀に内木綿之真迮国と見えたり万葉集に虚木綿と書
てこもりてをれるをつゝめり蛮の内の虚なることといへるを紀は狭き義こ
と誤ハ眉隠に同じと云り
うつゝなき　現なき也うつゝなくひとへにいへるなり心なきといふ
意なることを覚ゆるをいふうつゝをぬけすといふ給經も同じ俗に略してうつゝと
のみいふハ悪しかるべし
うづら　文選に穹隆を訓せり文堆をよめり埋こゝろしの義也○人
の系譜にいふハ氏高の義なるべし
うづくまる　蹲踞といふ古事記にうづまりともあり万葉集よりあるは
うつとも見ゆうづゝまりにて埋隠の義成べし今いふつくばふ
うつはもの　倭名抄に見ゆ器をいふうつは物の義をとれり人の器量を
いふも同意なり源氏などにも見えたり
うつしごゝろ　万葉集に現心とかけりうつせみのうつし心とも見ゆ後拾
遺集などにも見えたり○うつりがの事に出たり万葉集に写心とも移情とも

もみぢより古今集なり
其人ハことなることハ紀有常がむすめにして
うつぶしぞめ　空五倍子染也色なし八仲也喪の時のものなりといへり
緇をいへり悦郎が説にとりたる事なり大和物語にみえたり
うつろひたがりたる　伊勢物語に菊の事をいへり是也衰へて後に変したる色
なり源氏にも菊をうつろひまてもめでたりとみえたり新古今集なり
菊の色くすみてハみえしど初霜の後のうつりたるもあるなれ
東坡の詩に菊残猶有傲霜枝とみえたり○並にあかまにうつろひ菊なり
表中紫ハ青色といへり
△うで　倭名鈔に腕をよめり上手の義といへり又たゞむきともいふ
うてな　神代紀に臺をよめり倭名抄に棚閣をたなともよめり上棚の義
たとへばあを新撰字鏡に嶢樹をよめりてなとよめり書註に土高曰臺
有屋曰榭とみゆ
△うとし　神代紀に疎をよめりうとむともうとんずるともいへりうとしとし

亦同し祝詞式に疎ぶるとも疎びともみゆ疏も同し○伊勢物語にうとき人を
うとむは外人とみえたり
△うな　日本紀に膿をよめり或は古へ片仮名にてうなとかけるより十に誤り
也といへり○祝詞式に頸をよめりうなじと同じ○息の一種にうなと称するも
此類なり海をうなと訓せるも日本紀にみえて嬰児の義なるべし
うなゐ　萬葉集に童女髫髪をよめり新撰字鏡にハ髫をよめり和
名抄に俗用宇奈為二字とみえて宗祇の説に十二三までをいふといへり項
居の義髪をわげ後ハ項にかゝりたるなるべし男女ともにいふなり○
續日本紀に弱児をうなゐとよめり和名をも同し○花
肆にて白頭翁をうなゐこと称せりぜかひ中ともいへり
うなる　俗に呻吟をいへり獣の声にいふハ言る也
日本紀の訓にうなるといふをうなるべし○續紀にうなるといふを
とおといふ五代史正傳積銭盈室に中常有喪如牛とみえたり
うなて　日本紀に溝をよめり八雲御抄にもうなてハみぞをいふと宜へり　臥手

の義なるべし縄手の類也○信濃国更級郡に小谷と書て をうなてと呼る
所あり同義なるにや 雲梯ともいへり○神賀詞に宇奈提尓坐と見えたるハ
和名抄高市郡雲梯(ウナテ)と見え式に高市郡高市ノ御縣ニ坐鴨事代主神
社大と見えたり今大宮と称せり高殿村にまします天武紀にも高市郡
の大領よりはじめて事見ゆ萬葉集にあり
　思はぬを思ふといはゞ真鳥すむ卯名手の杜の神ししらさん
とよめり是ハ古へハ神稜威を尊みしなるべし○うねを 此社ハ畝尾
なり久米の古き山乃内にてむくの大木なり又高宮なりて大社にてそ云伝
なしといふ
うまや　日本紀に櫪中をよめり うまやなやといふ俗語は近し うくわやはし
さきうやハ雲伝抄にうまやハ八人をとゞむるをいふと宣へり
うながす　日本紀に催驅をよめり今もある言なるべし
うながし　日本紀に令をよめり今丞をいへりさればと云ふ若今の義なるべし
古家流の訓是蔵へし○今昔物語に泣をうながしてといへるも同じ義

代紀の訓よりうながせりとみゆ うながせ反げなれバ所嬰をうながけるとよめるも同じ
うなづく　黠頭をいふ項築の義也首肯も訓べし 拾遺集に領状を
よみ古名伊勢物語に領拝を填より日本紀に不聴をうなづかざると
訓せるも同じ
うなゐまつ　源氏よりうなゐまつと見えてうなゐ兒乃松といふ
義なりや 和名に文選の馬鬣松をよみ侍り墓なりし此松をいふなり
人の弱かきみと見るよしなりといへり是ハ馬鬣封の義によるなりされどこ弱
松の馬の髪のごとくに似たるといふ義なるべし墓上に植るハ五枝松とて五株植
侍る故実なりともいへり
うなゐ髪　万葉集に放髪丱又童放をよめり 弥未着冠女と
注せりうなゐハ項居の義をうなちの髪ともいへるさればハ八歳子となり
ていさゝて長からしむそれより十四五歳と加て男となるまでも蓋て垂
なるハなかにもうなゐなりとも云るハともいへり
△うに　海膽をいふ倭名抄に霊螺子をよめり海丹の義なるべし海栗

を訓するハ謬なりといへり○伊賀の方言に石炭をもいへり綿のかすをいふ下品
也芭蕉が発句に香にゝほへうにほる岡の梅のはな
△うぬ 崇峻紀におをよめり己ねの転せる成へし○人を罵てうぬとも
いふハおのれの転語なるへし○鵜沼ハ尾張の地名也
△うね 神代紀に田畝をよめり 壟も同し 殖根の義なるへし 塍ハ田の
うねあぜ 畦ハ畠のうね也 霊異記に畝もよめり○古今集にうねびまうちの
野なるといひ出山と万葉の同じ○宇祢の城ハ播磨にあり太平記に見ゆ
うねる 畝よりいへる詞なるへし文選の容裔を訓せり注に船行貌と見ゆ
うねり○木曽路にて小波をうねりといふ
うねめ 采女をよめり 童女(ウナヒメ)の義なるへしうねへとも云り 嫁をいむ
も二合の字書の正義にいへり百寮訓要抄に采女ハ上古より
才貌ある女を撰てたてまつる也 風俗通に采女采擇其容色之女也といひ
御陪膳の采女あり髪上の采女あり 又ハ年中陪膳を勤むるを見て
細そして髪をあぐるを見て称を実ハ二役になりけれとも也今一の采

女ハ刀自との二の采女ハ沙汰未頭にておはちやといふ三の采女ハおもとかくといふ
なり○光仁紀に天下氏姓青衣為采女云々と見えたり西土の古に青
衣といへるハ婢妾の類の称なるをもて之傳異記にも青衣女伴と見え文
女孺ハ腰に青きをぬぐ纏ふをもいへり○大同年紀に斎宮之采女もみえ
たり○古事記に三重の采女と見ゆ伊勢国三重郡に采女村あり其采女の
出し所なり
△うの 所の名姓氏なとにいへり日本紀に鸕鷀野とも書り○赤松の家ま
宇野正寛あり楠正儀に仕へ其恩信に服して僧となりし人なり
うのまる 叙の名也白河院神泉苑に御幸ありて御遊の序に鸕鷀をつか
はせて御覧ありけるの逸物ときこえし鵜の池の中よりくひてあがる
よし保元物語に見えたり崇徳上皇の源為義をたのまるゝ義にて賜はりし
後に範頼まで経伝はりて平氏夷滅の後鎌倉に来りし事ハ東鑑
にみえたり
うのはなくだし 万葉集にあり卯の花腐(クタシ)の義なり降しきるのことをいへる義也

卯月の比よりふりつゞきて物も腐るといへり西土にいふ迎梅雨くといへり○
俗説に花腐といふも同し
△うば　祖母又嫗又姥をよめりうとおと通す今ハ乳母をいふといへり○
乳母といふハ保傅姆を指ていへり○老の名よりうばめとそだてしもの
ころしなといふも老嫗の義なり○貝の名にもいへり○姥か池ハ東海に
ありて姥と呼へハ沫湧出る西土の娘泉に似たり　姥神ハ江戸葛西にあり
うはみ　倭名抄に褶をよめり日本紀にもひらひとよめり但馬紀にもとさ
いへり梁塵抄にもひらみともいへりうへものハ上裳なるべし束帯色
目に男ハ襞の上に着し女ハからきぬの上に着るとそいへり神祇
式にハ裳褶一腰褶一條などて二物とせり
うはさ　噂をよめり詩の小注に聚談也と見えたり或ハ背語とよみ又風
聲とも譯せり表様の義なりといへり○諺にうはさをすればかげといへり必
する人の音信なくといへり又人事いふ見代をいふを謬て延ともいへり
うはなり　倭名抄に後妻をよみ日本紀の前妻をもよめりうはなり言る和し

なりハ並の義ならび反て新撰字鏡に嫉をよみ日本紀に嫉妬をうはなり
ねたみとよめるもまた見え義氏家訓に後妻必悪前妻之子とも見ゆ
○攝の有馬にうハなり乃湯あり足音を聞けバ熱湯沸をいふ西土
の溫泉のごとし大和にうハなり山あり
うばたま　烏羽玉の義といふ烏ハ音なるをいふぞそ鵜羽玉の義なりといへり
されど日本紀古事記万葉集皆ぬばたまとのみよめり古今集よりうば
たまとも見えてうばたまハぬばたまの転なるべし
うはそひ　新撰字鏡に編をよみ論語にて表をよめり○疊の義を
うはそひの称なりしといふ
うはべなき　万葉集によめるうへなきかももうへなるを妹にもあるかな
ともよみてうへ源氏にたぐひなきかなるけなるをいふなり
うへかさび　元丹集の序にみえたり惺齋此辞をとて離騒の昌被を
訓せられし東見記にみえてうり源氏にはうひもうしたまふと書るも直衣のひも
なり○建武年中行事に賞翫してひもとくなといふ事ありけ

△うひ　初といふ生日の義 古今集にうひ〳〵しと我はけさうひにぞ見つると見え催馬楽にもけさかけある初なといへる是なり

うひはつ　嫡子といふといへり今も初産の子を男女ともにうひごといへり

○淡路三原郡にうひご山あり鼻子山とすり又胞山ともいふ大和大国魂神社あり諾冊尊を祭るといふ性霊集に両尊鼻子之洲と見えたり又は八諾冊の首をぬひ鼻子は大和也といへり老子に玄牝也於人為鼻と見えたり

うひかうぶり　初冠也運歩にも見えたり名伊勢物語に最頭と見えたり元服をいふ○孝徳紀に初位をよめるも同義なり

△うぶ　真字は俗に本質を失はぬを飾らざるものにいへり産の義なり産出のまゝなるをいふ

うぶめ　倭名鈔に孕婦をよめりうぶは産の義也○今昔物語に見えたる産女を抱きて人を誑かすといふ夜中川に居る女をも名くるも義同じ是は河童光獺の精魅なるべし

うぶや　伊勢物語にも産屋の義生名本に鵜葺屋とよめり神代

紀に鵜羽にて産屋を葺し事によりて紀にも見えたり○初産の時に父母の家に帰りて子を産は婦人遇辜経に天竺俗禮産日帰父母國と見え沙弥塞律に婦有娠送帰其家月満生女と見えたり

うぶゆ　産湯也洗児湯をいふ姓氏録に淡路瑞井水奉灌御湯と見え崇武紀日記皇子誕生の條に浴湯もあるを称して甚多き皆白きおひしありと見えたり

うぶすな　日本紀に本居をよめり産土の義成べし○邑里の名によぶも名ある人の出たる所をよぶもこの義なり風土記などにも見えたり○俗に村の社祠をもいへり神名帳に宇夫須那神社といふも皆同じ西土の斎土地なとに見えたり○児を生んで産土の神に詣る事竺土も同じ王巌鷹抱太子謁大自在天神廟と涅槃経に見えて乳母抱而詣城隍天神といへる法苑珠林に見えて城隍をうぶすなと訳せり

うぶやしなひ　源氏にみゆ禮内則に接字をよめり平氏太子傳李部王記なとに産養と見えたり産所の饗食なり西土の産育とは異なり

もり○李部王記に碁手銭二万とみえたるハ遊興の賭乃用なるべし
△うへ 上表をよめり浮方なるべし方俗にいふともいへり○ほとりの事を
うへといふも多し西土の川上のごとし○上ハもと天子の称なるを源氏枕草
紙なとにいへるハ摂関の内子をさせり狭衣物語にハ中納言うへ二人と見え
てもつはら位ひくきにもいへり又将軍義詮を女房の詞にうへとよへる事太平
記にみえて義満公を上様といひし事明徳記にみえたり○伊勢物語に
へなりけるといへる所ハ上の字なるべし○父うへ母うへ姉うへ尼うへ
なとよべる称なりもこれより西土長上明上の称のごとし○於字延喜
式萬葉集儀式帳などにうへとよめり平上に於ても同じといへり○
筌を倭名鈔によめり笥も同し万葉集抄に竹にて編る簀といひ
ろく束をいひてなべて山川の瀬にふせ重てうへの中に入るを流して
魚の流入をえとるよりいふ魚経の義なるべし今もいふどうといふ○萬
葉集にうへハなさぶりと訓るハ哉ハ莫下の義なるべし○上古の代太平記さゆ
うべな 日本紀の訓によるべきなりといへる万葉集に諸々名と書せり

古事記の訓によるべしとぞともよめり
うべなひ 霊異記に諸字をよめり日本紀に自服又謝罪をうべなひぬ
とよみ不服をうべなはずとよめる是也続紀にも至誠のうべなはむと
ありてとみゆ
うへのきぬ 倭名鈔に袍をよめり表衣の義也君臣上下の別ハ色を以
これを差にして縫腋に闕腋縫腋の二ツありて輟耕録に凡上蓋之服可
喚曰袍とみえたり○袍の色推古天皇の御宇より位階にて色定まり
今四位以上の黒袍を忌せらるるハ建暦より後の事なりとぞ○諸社の
神人位袍の組多くハ其社の神衣と申わろして忌しみ侍る事多し
熱田の祝師撿挍るとの桐竹もを紋としといへり
うへのはかま 表袴の義和名鈔にみえたり裏表の別なく裏をば濃く
大口なりといへり○女官飾抄に童女ハ晴の時ハ打袴をうへ袴の上にあり
表袴をきるにともひまさすけ装束抄にかざみうへのはかまハすこしくと
いへり○僧の法服にも用ゐる僧ハ門跡がくるり紀長なりといへり

△うま

△うまと　馬をいふ称呼なるへし一説に胡馬の音國華合記集にも
馬をは馬と書せるハ武備志に牛を胡水と書せるかことくなるといへり
和蘭人の語に天下の良馬ハ波斯と巴爾齊亞とにありとそ げに暹羅
占城乃諸国の貢ともなるを見し事ありしも此なとにやといへり又利未亞
洲の馬ハ猛にしてよく虎と闘ふもありとそ○登嘉記に家鞍の名あるハ二
日月 和琴 鳥形 浦々 藻形 高坂 大甘子 小甘子 長门 小鼻な
んどいへるとあり○明に茶馬司を立て 吐蕃名馬を出せるに茶を
好むゆゑに茶を吐蕃へわたして馬に代るなりといへり○馬ハ十二月にして
生れ歯をもて年をはかつ四尺をたけと定めてそれより上を寸といふ八
寸に餘るを長に餘るといふ四尺に足ぬを駒といへり○礼の雑記に自下
曲路西隣に下ハ謂馬之とあり○保食神ハ馬祖之建御名方命ハ先
牧くりて二神を厩神とす○左馬寮生馬神ハ日本紀略にみえて右馬寮
保馬神も諸社根元にみえたり○名馬悪馬の字北史にみえたり○日本

紀に甘字方葉集に味字をよめり

うまし　日本紀に可美可怜甘美古事記に味字をよめり俗に熟
字旨字なとをよむも皆通ぜり説文に美ハ甘之字書に旨ハ美味之とみえ
ゆ梅塩の義にや古へ公けしといふるとうましといへり日本紀に善を
うましとよめるも同し新撰字鏡に醰も訓せり厚味と注せり

うまゆみ　延喜式に騎射和名抄に馬射をよめり日本紀に馬的と
まりさせと通典に記せる馬射の名也をはハ草鹿に似たり馬的の文字
も搖て若しくハ犬追物の始なりしにや日本紀に後世の騎射とハ異なれ
ばあるへし○軍防令に便弓馬者為騎兵隊餘為歩兵隊の義解に謂
弓者歩射也馬者騎射也とみえたり西土の書に習騎乗馬と書るも騎射
をならふ義なるべし我朝軍器を造るも古の武士ハ馬に乗てのみ者なりけるハ
必弓懸をさしてせするなるに弓をもたぬ人とハ記しき事にいひしかと
もに之し自ら持からんにハ必人に持せて具しつらむ古き物にハ見えぬせ
めとあり今侯家の弓手を馬上と呼も捜ハ記りぬ○御術の類に曲馬と

狎子らハ援騎也夢華録に傀儡の次に載たり
うまびと　日本紀に君子搢紳良家なとよめり可美人の義なるべし
万葉集乃肥人額髪結在なとうまびとゝもよめり良基公の嵯峨野
物語に馬人の読たりしハ誤なるべし
うまぶり　日本紀に殖字蔓生蕃息産児なとをよめり産殖の義なるべし
うまごり　万葉集に味凝味凍なと書り綾にほひけるなと織の義
されバこれハうまごりとつゞけしといへり錦織の例の如し
うまざけ　日本紀に旨酒をよみ万葉集に味酒とかけりみ又み
むろのほぎげの説ハ崇神紀乃訓に大物主のかみしみきとよめり
神酒をみわともよみ又神をみわといへるハ醸の義なるべし
○儀式帳に味酒鈴鹿國の枕辞とす○三代実録に大内紀味酒首
文雄歟備武内宿祢太臣第三男平群木菟宿祢即是文雄之祖也
木菟宿祢之後賜二味酒臣姓一漏落被レ貫二伊勢國一といふ式伊勢負
辨引に平群神社あり大和の平群郡平群坐紀氏神社を招請せしこと

社の也ハ志知村なり
うましもの　万葉集によめるとなる物の義なしと同し○馬下
乃阿倍橘と見ゆ甘物といふ義なるべし
うまいもねず　万葉集に味宿不寐とよめり日本紀の訓にうまいといへり
ともよめり熟眠をいふ今の俗にうまいといふハ辞なり
うまのはなむけ　新撰字鏡に餞をよめり餞ハ食にかく贐ハ貨にかゝる
旅立人を送るとて馬の鼻向の義也今略してはなむけといへり拾遺集に
せんと音にも詞書に見えたり門出を祝ひて途中恙なからんとあり
道祖神に手向るなるへし
△うみ　海をいふ全水の義なりや又産の義魚鰕珍怪を錯て出すといふ
といへり万葉集に池を海ともよめり湖を水海といふが如し○
一書に海在國之中國包乎海者曰二地中海一と見えたり○神代にうみ須流のう
み夢のうみ腹のうみなとハ喩ひなり○万葉集に瀰をよめり説文に渤瀰ハ海
之別名也と見えたり○大海をよめるをうみくといふ読ハ東坡詩集の注

に諺有側手障黄河之語とみえたり○朦をよめるは熟の義なり和名鈔にハ
うみあらしとみえたり○産の義は孵卵によれり
うみを　績麻の義也古事記に紡麻とも見ゆ万葉集に績麻とよめるも同し
うみがつき　神代紀に孕月をよめり今いふ臨月也
うみのこのやそつゞき　日本紀に子孫八十連属又子々孫々八十聯綿
をよめり又生児生子をうみのことよめり万葉集にうみのこのいやつぎ
つぎしらるゝとも見ゆ

△うむ　子をうむハ生産の義にてまとひめもまて用ひたり○麻をうむハ紡績
の義○事ようむハ倦の義○木實のうむハ熟の義○新撰字鏡に膝をよめり
○古事記に生くをうみくてとよめり
うむき　日本紀に白蛤姓氏録に大蛤をよめり海つ栗の義にて又む
かり反こし又母貝(オモカヒ)也おもハうむと同音さハクひ反くるハ古事記
にみえ倭名鈔に海蛤うむきのかひとみえたり今俗をはまぐりからを去
うるをむきみといふハうむきの義なるへし新撰字鏡に蚶も蠣もよめ

り俗に海たまごりといふもこれ也古事記に蛤貝(ウムキ)比賣見ゆ
うむがしみ　續日本紀に宣命にみえたり日本紀に徳をおむがしみと
よみ新撰字鏡に僖慶をおもがしとよめるに同し
△うむさびまつり　新撰字鏡に祧をよみ以賑祀司命也と注せりうむさ
びハ産霊神をいふなるへし賑ハ集韻に腊之全者といへり
△うめ　梅をよめり万葉集倭名鈔皆同し古今集にもむめとよめり
熟實の義にて西土にも熟梅の名あり説ハ梅の唐音にといへり万葉集
に烏梅(ウメ)と書しは音を借りしにて今いふ烏梅乃ふすべうめにハあらす同
集に宇梅とも見えたり今俗むめと云ふなり○うめぼしハ梅干の義白
梅といひ今ハ白梅の名をもていへり○説に好文木とよめるハ晋起居
注に晋武好文則梅開廢学則梅不開といふをもて好文木と称せり今
俗白梅の香をいはゆる一種の梅とす○詩経に梅の実のうまきを挙てむを
賞せし事見えたるも楚辞には見えてなし豕邦のそれとも漢渡の物なる
をやといへり山生の品なるも琉球國にハ年毎に豕邦より渡るといへり

○野うめハ江梅なるへしといへり五色梅ハちいさきに分せりといふ薫梅あり○
梅宮ハ橘氏の神なり三代実録に見えたり梅津の里ハ山城葛野郡也
うめく　俗に呻吟をいへりうめくに同し源氏物語紙なとにも見えたり又
涎吟をもよめり
うめ歌　業成朝日紀にみゆ湯に水をさしてうめるの意なへし本草に
以て陰陽水をうめゆと訓せり○産字倭字埋字なとをもうめとよめる義也
△うもれ木　日本紀に没をよめり埋も同しうもるゝの意なり
△うや　日本紀に禮をよめりゐやに同しうやまひなとも見えたり
うやまふ　敬禮をいふゐやまふの轉也○うやくし　敬ハ恭敬の体をいふ
△うゆ
△うよ
△うら　裡をいふハ衣の内なるをいふ○家のうちも裡の義也○浦をいふも
海面に對せし稱なるへし奇に多く恨をかけたり万葉集に灣をもよめり
又湖のうらなとも内の意なり古今集伊勢物語にうらみをかけたるなと

あふ緑なるをよめるハうらしとよめり○木末をうれといふハ万葉集に多し今もこゝろ
にも草木なとにうらといへるハ末をいふなり○占卜をうらといふハうら
うらと定るへき所を文裏を察して表を決する意といへり占筮ハ
陰陽家の事にて亀卜ハト部家の事也○心をうらといふ
多し詩に不離于裏とよめりうらうらとひしうらかなしうらめつら
しきなともみないふ也古事記の奇にうらなきとしといふも心
悲し也とそ○うらくはしなといふもうらなきと同し事なり
うらゝといふ○浦野の山万葉集によめり浦野ハ信濃小縣郡也延喜
式に浦野驛东継に浦野庄あり
うらみ　恨をよめり怨望をうらむハ義訓也裏見の義也と見えたりして
後をみるハ怨恨の意なり奇にうらみ葛の葉をかけていふ事多し又いへり
和泉信太社の葛の葉ハ風ふきて白くうらの見えるをよめり
うらめしともいふめし又みる靈異記に怖をうらめしみとよめり
○万葉集に浦箕をよめるハ浦回と同し○裏見の瀧ハ日光山にあり

はゝうらみの山ハ八雲抄に伝濃とす
うらへ　神代紀に卜事をよみ又卜定をうらへとよめり卜定田ハよみも
同し万葉集にも武蔵野にうらへかたやき又ゆきハあまれうらへをかた
やきてさよめりへハ行への略あへハあハせの反へ古事記に奇なる尾に
行合せをゆきあへとよめりて古事記に卜相をもうらへとよみて神
代紀に卜合をうらふとよめりかたやきとハ鹿の肩骨を焼く事也とハ
事古事記に見ゆ○卜定を今うらなひとよめり大嘗会の国郡卜定なとみえて
うらべ　卜部の卜と職掌をいふ後世氏ともなれり壹岐對馬伊豆なとよ
り出たり臨時祭式に見えてことを祝詞式に宮主の卜部といへり一説
に右三国より出るをそへて是ハ宮の出ちへもハ出る又いふしといへり
うらなき　万葉集に卜嘆をよめり袁と嚏の義なるへしぬえこともに
よめり日本紀に播の卜筮といへりしかし万葉集に袁をうらとよめり
うらぶれ　楚辭の悒くをもかく成せり憂息と注せり万葉集に於君戀
之裏要浦觸とかけり古今集にうらびれともみえたり反をいふぶれ

を納まへべきなりと同音なれびに挌まびに同しといへりされどうらを
心といひおもてをハあらはすの略温の義なるへし公任の歌に抱思ひなし
げなることといへり
うらやむ　羨をよめり日本紀に嫉をもよみ新撰字鏡に怏もよめり裏病
の義也うらハ心裏をいふ霊異記に妬忌をうらやむしともいふ病し反みし
うらかた　日本紀に占状をよめり卜兆をいへり令義解に卜者灼亀也兆カタ
者灼亀縦横之文也といへりされハかたハ象の義なるへし武蔵野にかたやき
占方といふ歌もありて万葉集にしらぬ妹か名かたに出んかもとみえたり
とり○朝野群載に中臣宮主灼手と連署せり職名也
うらなき　卜正しき義神代紀に卜者をうらなきと訓せるかめし拾芥
抄の問＝夕食諸に在り人うらまさにせよとよみ新古今にうらま
さに今ぞ見ゆらしとよめる是也万葉集
大和の津まうたにわらんとハ海うらに名てこそうたへり移し
うらゝ　晴してうらゝともいへり万葉集にうらゝに照る春日といへる

本注に春日遅々をいふとみえたり今昔物語に小雅五綿の猶を也たま
ひし詩の二月三月日遅々をさゝうらゆやかひらうらとよむといへり此義也
うらなふ　古訓なる占也又卜合の轉語也古事記に占相をまうらふらへ
といふは此轉也○俗にうらなひさんといふハ卜者をいへりうらやさんとも云
さんハ算の音なるべし全浙兵制録に課命士をさんなさと訳せり
うらさふ　占象を問の義也○字書に卜問齎財曰貞とみえたり
うらさみ　令義解に卜食を見てあり日本紀に食卜をうらにあへりとも
よめり卜の字形縦横にならむ縦を吉とし横を凶とせん
うらがき　野槌に昔の本ハ厚紙にて巻本なるゆゑに注釈文ハ勘文
を裏に書て看をもて裏書といふと見えたり古へ紙の乏しかりし
世の風俗なるべし今とぢ本になりし後ハ其のうら書をも文の後に書
出せし物多かり○書札にもいへり
うらおもひ　日本紀に猶豫を訓せり万葉集に占思に作るも此義也
うらもひともいへり或ハ辟易をも訓せり紀略なし

うらわかみ　弱草によめり万葉集に末若と見ゆ古き此草の義此
うらくし紀をいへり
うらもと暗し　万葉集に見ゆ心もと暗し也此義也
△うり　瓜をよめり口渇をうるほすより名を得るなるべし売ると云へハ
非なり又君を当られたる者ハ甜瓜とかうるうりともほそうりとも
いへり和名抄に青瓜あをうり班瓜まだらうり白瓜しろうり黄瓜
きうりとみえたり○犀ハうりざね也文選に瓜表遺犀とみえたり
○又名をかたうりざねといふと訳り○談苑に俗以破瓜為二八と
字とも見え漢書李廣傳に本注く
△うる　得をよめり元得及う也○賣致もむハ物を賣て利を得るより
いふ也市も貨もよめり沽ハうるとも かふともよめりまてうりハ行賣也
○醜女をうれぬといふ俗語ハ列女傳無鹽の語の入衢嫁不售より
出とぞいへり
うるふ　潤澤をいふうるひともうるほふともいへり物の湿沢なるを語る也

義なり○倭名鈔上総の郡名に湿津をうるひづとよめるも義同し
うるけ　神代紀に凝駿をあやうけとよむなるへし　古事記に
宇流鈎とみえたり
うるはし　日本紀に善万葉集に愛字霊異記に姝又華をよめり　神
代紀に明彩また友善をもよめり伊勢物語にもうるはしき友又うるはしと
みせよなどいへる是なり書紀に忠字をよみしもこれ也せり涅と
義通へり美字麗字も義同し　新撰字鏡に嬋媛をもよめり一説に
うるはしとうるはしき通へり又うるはしき物語にうるはしとも見えたり一説に
ちと裏細（うらぐはし）の義にてうらくはしなるなり
うるさし　悩ましげなるをいふ一説にうるさしとは煩すきれいらるかる
なりさし又しなれはうしの延約なるへしといへり又うるさしと音
五音す苦名伊勢物語に煩をよめり
むつかしくわづらはしくて思ふ人間はぬもつらしとぞいふなるへし
江談抄にいへる右流左死の義ハ安からず

うるち○　粳をいへり秔も同し　糯に対していひける義にや　延喜式
に獲字をよめるは秋獲の義をいふや黍粟にいふも同し
うるふづき　閏月をいふ閏は潤餘の義なるは日本紀に涅とも訓あり
うるふどしといふは西土に閏年といへり○天は運行三百六十五度
四分度の一にして一年三百六十日と定て積に大小あり餘る六日を気
盈といひ足ぬ六日を朔虚といふ過不及を合せ十二日三年積て三
十六日の餘りあるを以て三年に一閏をおく五年再閏十九年にして
七閏に及へは餘分なし是を一章といふ
△うれ
うれ　万葉集に末をよめり木の末をいふ上字の意也のもとすゑ
乃うれ葉萩のうれなどよめり○年の始物語にいざうれを誘我とせり
万葉集にうれむそとかよみ稍もそろし
うれし
神代紀に喜をよめり嬉も同し　新撰字鏡に嫐をもよめり
祝詞に嘉志美ともよめり皇代紀に歓喜又飲遊をうれしむとよめり
得心をいふ○伊勢物語にうれしくてかへりにかゐる也と延言也○うれしさ

といへしたる所の名著聞集にみえたり○うれしのハ伊勢によめりて
倭姫命に起れり一志郡阿坂乃あたり也肥前にもおなし名あり
うれふ　憂患をいふうれへとも云り愁ひ又ひと三代實録に憂礼比
とよめり古今集にうれハしきハよめり詩經に呼をよみ新
撰字鏡に忡もよめり
うれたき　日本紀に慨字をよめり憂痛き也訓義なへし古事記万
葉集伊勢物語等にもみゆる所同し縁ありといふつらくもあらなく
も見ゆといへり
うまづく　古事記にみゆ嘉づく也そ今かけづくなとゝいふ如く賭物の
義なるへし一説に憂償の義賭物に負しを憂ひ悲て償ふをいふ
にて不償宇礼豆久之物といふ是なりといへり又此者神宇禮豆玖之言
本者也ともみえたり
△うろ　有漏なり梵書にみえ雲白河院
うろよりもむろに入ぬる道なれハこれそ佛のみもとなりけれ

○俗に老樹の空洞河中なとの洞窟をもいへり或ハ阿とよめり玉
篇に山穴と注せり
△うゑる　殖をいふ古本風俗歌にうゑゆるなかれもうゑと同し
△うゐ　いろはうたのうゐのおくやまといふ有為の音也無常の事と釈せり
俗語有為轉変も梵書に出たり
△うゑ　神代紀に飢饉をよめり推古紀の奇にはうゑにてとみえたり
○飢てハ味なきものなしといへり史記に饑者甘糟粕とみえたり○殖
も假字同し音便にてうゑともかりもよみ万葉集にうゑともみえたり
△うゑじ　活板にいふ植字の義也土御門院の元久年中より始るといふ
△うね

荏原